



トーマス・マン『魔の
山』下巻のあらすじとメ



目次

『魔の山』下巻のあらすじメモ	1
--------------------------	---

『魔の山』下巻のあらすじメモ

トーマス・マン。

1924年発行。

高橋義孝・訳。

1969年発行。

★★★★☆

<目次>

第6章

移り変わり

その上もうひとり

神の国と悪しき救済について

激怒。そしてなんともやりきれないこと

ほうほうの体で

精神錬成 (Operationes spirituals)

雪

「勇敢な軍人として」

第7章

海辺の散歩

メインヘール・ベーベルコルン

トゥエンティー・ワン (Vingt et un)

メインヘール・ベーベルコルン (続き)

メインヘール・ベーベルコルン (おわり)

巨大な鈍感

妙音の饗宴

ひどくいかがわしいこと

立腹病

霹靂

注

解説

<登場人物> @Wiki より。

ハンス・カストルプ:23歳→30歳。造船技師志望。三十四号室。★

ヨーアヒム・ツイーセン:ハンスのいところ。士官志望。少尉。★

ベーレンス:顧問官。院長。青白い顔。油絵を描く。ラダマンテュス。★

ドクトル・エトヒン・クロコフスキー:助手。代診。精神分析家。35歳くらい。青白い顔。

黒い髭。黄色い歯。ハンスと部屋で何か研究。心霊研究・オカルトに走る。★

ジェイムズ・ティーナッペル:ティーナッペル領事の息子。ハンスの叔父。副領事。四十歳くらい。★

ロドヴィコ・セテムブリーニ:イタリア人。30代。筒琴弾き。人文主義者。啓蒙主義者。市民的な世界共和制主義者。ウィーン(オーストリア)を改革すべきと考えている。人類の進歩について熱く語る。フリーメーソンの支部長(ナフタ評)。ナフタを俊敏だが淫蕩としハンスに気をつけるように言う。ハンスの師のような存在。★

ルカセク...婦人服仕立て師。セテムブリーニとナフタの家主。

レオ・ナフタ:幼少時の呼び名はライブ。ユダヤ人。30代。セテムブリーニの同居人にして論敵。醜い小男だが服装は立派。フレデリクス大王学校の古典語(ラテン語)教授。副助祭。聖職者的な四海同胞主義者。カトリック・イエズス会だが反資本主義、テロリズムを容認する貴族主義、社会主義。スペイン風を好む。健康と生への愛着を非難。平和と幸福を奏でる人文主義の肉の愛、肉体的快樂への愛を非難。スコラ学派の頭目(セテムベリーニ評)。

虚無主義者。天邪鬼。諧謔的で議論好き。自己満足。★

アントン・カルロヴィッチ・フェルゲ:ペテルスブルク出身。ハンスの食卓仲間。高尚な話は向かないと自称▲

フェルディナント・ヴェーザル:商人。マンハイム出身。ハンスの食卓仲間。ハンスの友情を求める。▲

ヴェンツェル:チェコ人。ボヘミア人。禁止運動支持者。

マグヌス氏:ハレの醸造家。

レーディシュ夫人:胸が大きい。ハンスの叔父ティーナッペルが懸想してしまう。

エリア・ナフタ:レオ・ナフタの父。屠殺者。モーゼ五書の研究者。ユダヤの宗教関係の役人。ある日惨殺される。

ラーヘル・ナフタ:レオ・ナフタの母。夫の死後ライプら5人の子供たちを連れて国を逃れる。紡績工場に勤務して生計をたてる。

ウンターペルティンガー神父:偶然ナフタと会い彼を暁星学園(モルゲンシュテルン)に通わせた。

カーレン・カールシュテット:壊疽のためささくれた指をしていた。病没。▲

ルイーゼ・ツィームセン夫人:ヨーアヒムの母。ハンスの叔母。

テディ少年:7年間で背が伸び、婦人たちから人気があったが21歳で死亡。

メインヘル・ペーペルコルン:自称ピーター。60男。楽隠居のコーヒー王。植民地オランダ人。★

マレー人:ペーペルコルンの召使い。

エジプトの王女:召使いを従える。ヘビースモーカー。

ドクトル陳富:チンフー。

エリー:エレン・ブランツ。十九歳。デンマーク娘。清爽。銀行の帳簿係。霊能者?

ヴェンツェル:チェコのボヘミア人。

ホルガー:エリーの守護霊? コックリさんで降霊される??

ヴィーデマン:元商人。30歳。ユダヤ人排斥に熱中。

ゾンネンシャイン:ユダヤ人。元商人。

フォン・ズタフスキー:ポーランド人。

ミCHEL・ロディゴフスキー:ポーランド人。

クリーロフ嬢:ズタフスキー夫人とロディゴフスキーの友人。ヤポルに侮辱を受ける。

ヤドヴィーガ夫人:ズタフスキーの配偶者。

カシミール・ヤポル:クリーロフ嬢を侮辱する。

ヤヌシュ・テオーフィル・レーナルト:ヤポルの友人。

<あらすじ>

謝肉祭の日以来、ハンスはヨーアヒムに後ろめたさを感じる。

クラウディアはダーゲスタンに去り、ベーレンス顧問官に彼女について情報を得ようとするが無駄だった。

セテムブリーニはハンスたちに自分は村の下宿に引っ越すことにしたと話す。

ザーロモン夫人は耐えられなくなって勝手にアムステルダムに帰ってしまった。

ドクトル・ブルーメンコールはすでに亡くなっていた。

学生ラスムッセンは死期が近付き寝たきりになっていた。

マルシャは大叔母といっしょに旅行に出ていた。

ハンスたちはセテムブリーニと同じ宿に住む醜い小男ナフタと出会う。

セテムブリーニとナフタは30代で同年代だった。

セテムブリーニが人文主義者であるのに対してナフタは人間の歴史における修道士の働きを賞賛する、反資本主義、テロリズムを容認し、諧謔的な持論を展開しつづけるのだった。

一方でナフタはイエズス会に属して家の中には豪華な絹物を所有していた。

セテムブリーニはハンスたちにナフタには気をつけるように言う。

ハンスとドクトル・クロフスキーはヨーアヒムにも内緒で何かを研究していた。

ヨーアヒムはベルクホーフ(サナトリウム)に入院して1年半になっていたが我慢できずついに軍に復帰するとベーレンス顧問官に宣言して、いとこのハンスを残して山を降りてしまった。

フェルゲとヴェーザルがハンスの食卓仲間となり、ヴェーザルは特にハンスの友情を求めるようになる。

10月、ハンスのティーナッペル叔父がハンスを連れ戻そうとサナトリウムを訪れる。

しかしティーナッペル叔父はレーディッシュ夫人に懸想しそれをベーレンス顧問官になじられ、翌朝山を降りる。

ハンスはヴェーザルとフェルゲを連れてナフタに会いに行き、彼の半生や思想について話を聞く。

ナフタはユダヤ人だがカトリック・イエズス会の修道士でもあった。

ナフタとヨーアヒムの共通点は革命のためには、手に血を塗ることを恐れないという原理だった。

ベーレンス顧問官の私的患者だったカーレン・シュテット(女性)が亡くなる。

その死をきっかけにハンス、セテムブリーニ、ナフタ、フェルゲ、ヴェーザルは健康と生と死について激しく議論をした。

拷問、死刑、生の市民性。

ハンスはスキーの練習を始め、雪山を冒険する。

ハンスは軽装でコースを外れて谷を滑っているうちに風雪に巻き込まれては凍え小屋の柱に身をもたせかけていつときのあいだ南国の夢を見る。

しかしハンスは起き上がってサナトリウムに無事帰着できる。

いとこのヨーアヒムは少尉に昇進していたが大演習を前に病が悪化し、8月ツィームセン夫人といっしょに再びサナトリウムに戻って来る。

その途上にショーシャ夫人と会ったという。
「スペインに行く」とのことだった。

ヨーアヒムが戻って、ハンス、ヴェーゼル、フェルゲとともに、ナフタとセテムブリーニの議論を聞きに通う。

ナフタとセテムブリーニはイタリアで醸成された思想が世界でどの程度通用するかという論題、ウェルギリウスの非難・擁護について議論を戦わせたが、ヨーアヒムの具合が悪そうなのでハンスはふたりでサナトリウムに帰る。

ヨーアヒムは食事中に咳をするようになり、ベーレンスの診察を受ける。

心配になったハンスはこっそりベーレンスにヨーアヒムの病状を訊くとやはり、喉頭結核のようだった。

ハンスはツィームセン夫人をサナトリウムに呼ぶが、ヨーアヒムはやがてやせ衰えてヒゲを生やし亡くなる。

その後、年月は流れ、クラウディア・ショーシャ夫人がサナトリウムに還ってくる。

しかしオランダ人の老実業家ペーペルコルンもいっしょだった。

彼は植民地のジャワ島でコーヒー農園を経営して財を成したが熱病に罹患していた。

ハンスはクラウディアに話しかけられないでいたが、ある晩新聞を眺めているハンスにクラウディアは「いどこ(ヨーアヒム)はどうしたのか?」と尋ねる。

そこにペーペルコルンも現れ、ハンスにひとをたくさん集めさせカードゲームを始める。

酔っ払ったペーペルコルンはみんなのために食事を注文しその場の支配者として振る舞う。

宴会は6時間、深夜2時にベーレンス顧問官が見廻りに来るといふ噂でみんなが引き揚げるまで続いた。

ペーペルコルンは別れ際にクラウディアの額にキスするようにとハンスに言うがハンスは丁重に辞退する。

翌日、ハンスはペーペルコルンの部屋に招かれるが、クラウディアの部屋は応接室を挟んで反対側だった。

ペーペルコルンの体調は悪くなった。

ハンスはペーペルコルンにセテムブリーニとナフタも紹介した。

ふたりは自分の思想を披露し、教会改革について論戦を繰り広げた。

セテムブリーニはクラウディアに冷たかった。

クラウディアは小男ナフタと仲良くしようとする。

クラウディアは図書室にいたハンスに近付いて来て話をし、ハンスは自分の想いを伝える。

ペーペルコルンを尊敬しているしクラウドディアのことも愛している、と。
ふたりでペーペルコルンを支えようということになり、クラウドディアはハンスに接吻する。

クラウドディアが買い物に出掛けている間、ハンスがペーペルコルンの部屋に行き話し相手を務めていたが、ハンスはついにクラウドディアが戻って来るのを待っていたと彼女への愛を示唆する。
ペーペルコルンはやはりと納得して、ふたりは決闘の代わりに兄弟の盃を交わす。

ペーペルコルンの注文で滝を見に行く事になった。
ハンスはヴェーザル、フェルゲ、セテムブリーニ、ナフタを呼び、ペーペルコルン、クラウドディア、召使いのマレー人の一行は馬車二台で遠足に出かける。
ヴェーザルは同じ馬車の中でじつは自分もクラウドディアに憧れていると告白する。

ペーペルコルンは轟音のする滝のそばでおやつの時間にする。
みんなそれに従い、一行はサナトリウムに帰宅する。

その晩、深夜、看護婦がクラウドディアの遣いでハンスを呼びに来る。
駆けつけてみるとペーペルコルンは毒針で自殺してみんなに見守られていた。

ハンスとクラウドディアはお互いに「さようなら」と言い合ってクラウドディアはサナトリウムを去る。
その後施設利用者の間では色々なゲームが流行るようになる。
ベーレンスはハンスの体温を心配し、球菌に侵されていることを発見し、ワクチン注射を勧める。
ある日ベーレンスが大型の蓄音機を導入すると、ハンスは早速使い方を覚える。
そしてハンスは交響曲やオペラのレコードを毎晩聴き、愛や死について考える。

もの探しのゲームをやっていたとき、エレン・ブラントはいつも不思議とすぐに探し出してしまった。
理由を訊いてみると誰かが耳元でささやくという。
幼い頃からさまざまな幻影を見たりするという。
少数の人(クレーフェルト、シュテール夫人、レーヴィ嬢、ヴェンツェル、アルビン、ドクトル陳富、ハンス、エレン)でコックリさんをやってみると、エレンにはホルガーという守護霊が憑いていることが分かった。綺麗な鳶色の巻毛の詩人。
ホルガーは長い詩も読んでみせ音を鳴らしたり電気を消したり物理現象も起こした。
ハンスの膝にはいつの間にか、クラウドディアのレントゲン写真が載っていた。
ハンスからこの話を聞いたセテムブリーニはエレンを悪質なまやかし者と一蹴する。

ドクトル・クロコフスキーは地下の分析室で彼女の研究を始めると不思議な物理現象が

たくさん起こり、クロコフスキーはテレキネーゼ現象という心霊現象であると説明する。

クロコフスキーはまた少数の仲間、パラヴァント判事、フェルゲ、アルビン、シュテール夫人、マグヌス夫妻、ドクトル陳富、ヴェンツェル、ヴェーザル、レーヴィ嬢、クレーフルト嬢とともに降霊会を開く。

部屋の電気を消して暗闇で蓄音機で音楽を流しながらの降霊会。

誰かの霊を降霊するというので、ハンスも参加し、クロコフスキーに言われてエレンと膝を接してホルガーの降霊に立ち会う。

ハンスがいとこのヨーアヒムを降霊するようにというと、エレンは長時間苦しみだす。

しかしその後ヒゲを生やして妙な軍帽を被ったヨーアヒムの姿が現れたのでハンスはエレンから離れて電気のスイッチを入れると安楽椅子の上にはいたヨーアヒムの姿は消えていた。

ハンスはクロコフスキーに慚然として鍵を要求し扉を開けて部屋から出て行った。

その後サナトリウムの中に不穏な空気が漂い始め悪霊が徘徊し始めた。

患者たちは従業員すら巻き込んで事あるごとに喧嘩をするようになってしまった。

ユダヤ人排斥のヴィーデマンはユダヤ人のゾンネンシャインに嫌がらせを繰り返し、ついにサナトリウムの中で殴り合いのケンカをする。

ヤボル氏がクリーロフ嬢に対して失礼な事を言うとその親しい友人たちが反撃し書面や殴打での応酬となってしまった。

セテムブリーニとナフタの体調は悪くなっていた。

特にナフタは身体の具合がわるくなるほど、その舌鋒は先鋭化して行った

ナフタは人類の築いてきた科学に対する嘲笑とそれに対する極端なニヒリズムを浴びせかけるのだった。

2月のある日ハンスはフェルゲ、ヴェーザル、セテムブリーニ、ナフタと2台の橇でモンシュタインへ散歩に行くことになった。

一行はシュトルゼルグラートの岩壁を眺めたあと療養ホテルに入った。

そこでナフタはみんなが話す事にいちいち陰険な口を挟みセテムブリーニは「言葉に気をつけるように」と注意するがナフタは激昂。

セテムブリーニはナフタに「破壊者、狂犬、血に飢えた男」と罵ると、ナフタは決闘を申し込む。

ハンスたちは動揺するがナフタの剣幕に押されて決闘の準備を進めてしまう。

ナフタがピストルでの決闘を要求しハンスは憤慨するもアルビンからピストルを2挺借りてしまう。

決闘開始。

ナフタと対峙したセテムブリーニはしかしピストルを空に向けて3発発射。

ナフタは「銃口を自分に向けろ」というがセテムブリーニは応ぜず、ナフタは銃口を自

分のこめかみに向けて引き金を引き死んでしまう。

ハンスは通算 7 年、サナトリウムに居続けた。

ティーナッペル大叔父も亡くなってしまった。

ハンスはほとんど寝た切りになっていたセテムブリーニの口述を書き取り百科事典編纂活動を手伝っていた。

1914 年、ヨーロッパに不穏な気運が高まり、ついにオーストリア皇太子が暗殺され、オーストリアはセルビアに最後通牒を突き付ける。

セテムブリーニはイタリアがオーストリアと結ぶことは喜ばなかった。

このヨーロッパ情勢の悪化で錬金術的な魔術が解かれ？ 下界に降りることに決めたハンスをセテムブリーニは抱き締めハンスの名「ジョヴァンニ」と呼び「あなた」の代わりに「君」と呼び両の頬に接吻する。

「君がもっと違った形の出発をするところを見たかった。これがきっと神々が決めた定めでしょう。有意義な仕事に帰ってもらうために君を手放したかった。祖国のために勇敢に戦いなさい。」

ほかの患者たちもみんな下山を始める。

第一次世界大戦。

単純なハンスも兵士になり戦場を進む。

奪われた陣地奪還のために進軍する 3 千人の部隊の中にハンスはいた。

陣地を奪い返した時は 2 千人になっていると見込まれる作戦だった。

ハンスは戦死した仲間の手を軍靴で踏み越えて進軍するのだった。

<メモ>

ダヴォス:サナトリウム(療養所)のある村。

ベルクホーフ:国際サナトリウムの名。

ラダマンテュス:クレタ島の王。冥界の裁判官。ベーレンス顧問官のニックネーム。

マリア・マンツィーニ:ハンス愛用の葉巻の名。

主意説:主知主義の反対物で意志を知性より上に据える哲学上の立場。

四大(よんだい、しだい):地水火風。万物生成のもとになる四つのもの。

ウェルギリウス:紀元前 70 年頃の人。ホメロスらに並ぶラテン詩人。著作『アエネイス』。

形而上学:

世界の根本的な成り立ちの理由(世界の根因)や、物や人間の存在の理由や意味など、感

覚を超絶したものについて考える。

対立する用語は唯物論である。

他に、実証主義や不可知論の立場から見て、客観的実在やその認識可能性を認める立場や、ヘーゲル・マルクス主義の立場から見て弁証法を用いない形式的な思考方法のこと。

科学的でなく哲学的に考える。

ゲッセマネ:新約聖書の福音書。

逍遙学派 (ペリパトス派):アリストテレス主義。そぞろ歩きしたりしながら講義した。

フリーメイソン:共済秘密組合。中世の石工組合から起こり 18 世紀初めにロンドンで結成されて全ヨーロッパに広まった秘密結社で、国際的な人道主義、平和主義の達成を目的とする。

照明派 (イルミナート) 的フリーメイソン。入会に際して服従と沈黙を誓う儀式がある。

プチブル (小ブルジョワ):資本家と労働者との中間層の人。資本主義体制のもとで被支配階級に属しながら、資本家階級の生活態度から抜け切らない社会階層の人。小市民。

ニヒリズム:虚無主義。ニヒリズムあるいは虚無主義 (きよむしゆぎ、英: Nihilism、独: Nihilismus) とは、今生きている世界、特に過去および現在における人間の存在には意義、目的、理解できるような真理、本質的な価値などがないと主張する哲学的な立場である。

カリタス:人類愛。

韃靼人:タタール民族。モンゴル系のロシア人。

・「祖国愛はベストでありキリスト教的愛の最も確実な死である」(イエズス会将軍ニッケル)

トーマス・マン『魔の山』下巻のあらすじとメモ

著 takaidos

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
